みたまのふゆ

「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいてゐる大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいて、生かされてゐるのです。

中世からの伝統を継承する
天王祭三ツ目神楽

毎年七月の天王祭は八日間のお祭りで、初日に御神霊が御神輿に御遷座になります。昔は、六浦の御旅所にまで向かはれそこで七日間滞在されました。現在は境内の神輿庫で過ごされます。

三日目の夕刻に「三ツ目神楽」が行はれます。境内に釜を置き、「ヤマ」と呼ばれる飾りを釜の上や周囲に設けます。

中世以来、鎌倉の鶴岡八幡宮に職掌と呼ばれる神職が奉仕し、神楽を伝承してきました。宮司の佐野家は職掌の一員でした。

神楽の中程に、「かき湯」と言って御幣で湯をかき回します。すると「湯花」が噴水のやうに立ち上がります。この湯花の立ち具合でその年の吉凶が占へると伝へられます。そのあと笹の房で湯を周囲に振りかける「湯ぐら」があります。この湯しぶきを受けて、無病息災でお過ごしいただければと存じます。

令和七年祭事暦

◎ **一月　一日　歳旦祭**
　鶏鳴神事
◎ **二月　二日　節分祭**
◎ **二月二三日　天長祭**
◎ **三月二〇日　春季大祭**
　祈年祭・合祀神例祭
◎ 四月二九日　昭和祭
◎ **五月十五日　例大祭**
　神社本廳献幣使参向
　琵琶島弁天社へ神輿渡御
◎ **六月三〇日　大祓式**
　大祓人形納め・茅の輪神事
◎ **七月　六日　天王祭出御祭**
　本社神輿御霊入・宮出渡御
◎ **七月　八日　三つ目神楽**
　無形文化財湯立て神楽
◎ **七月一三日　天王祭巡幸祭**
　天王神輿町内巡幸
◎ 七月二〇日　手子神社例祭
◎ 九月　一日　浅間神社例祭
◎ 九月一七日　熊野神社例祭
　無形文化財湯立て神楽
◎ 一〇月一二日　手子神社秋祭
　無形文化財湯立て神楽
◎ **一一月二三日　秋季大祭**
　新嘗祭
◎ **一二月　八日　歳の市**
　開運熊手授与
◎ **一二月三一日　大祓式**
　大祓人形納め
◎ **毎月　一日　月次祭**

天王祭と祇園祭
町内の山車・屋台
お囃子の役わり

京都の八坂神社の祇園祭は町衆の祭として神輿を町中の御旅所にお招きし、その送迎にお囃子をしながら屋台（京都では山鉾と称します）が巡行します。

町衆が力を付けた室町時代ころからこの形式が始まり、全国各地に広まりました。八坂神社の祭神は神仏習合の時代には「牛頭天王」ともよばれたので、この形態のまつりが「天王祭」とも呼ばれます。

瀬戸神社の天王祭も、六浦荘村内の各字地域が山車・屋台を所有し、最終日に六浦の御旅所から神社に還御する神輿に随行するのが習はしでした。

神輿とともに各町を巡った山車・屋台は、神社前に整列し、夜が更けるまでお囃子の競い合ひをしたと伝へられます。

お囃子や木遣りは京都風ではなく、江戸囃子の系統になってゐますが、神輿に山車・屋台が随伴するのは祇園祭の形式に起源があると考へられます。

現在、横浜市域には、このやうな山車・屋台が多数でるお祭りは少なくなってをりますが、金沢区では洲崎・町屋・寺前・谷津・釜利谷など屋台が多く残ってゐ

朝比奈町鎮座　熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものといひます。仁治二年（一二四一）、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたことでせう。

その後、元禄八年（一六九五）、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至ってゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのっとつた湯立神楽が今も続けられてゐます。

ます。

全国の「山・鉾・屋台行事」の著名なものが三十三件、ユネスコ無形文化遺産に登録されてゐます。金沢区の屋台まつりは、少なくとも横浜市の文化遺産に相当するものに違いありません。

写真は各町の山車・屋台の姿が残る古い絵はがきです。大正から昭和の初期にかけて金沢八景観光が湘南電車の開通により盛んとなり、絵はがきが売られるようになりました。その時代のもの見られます。

瀬戸の山車には桃太郎の人形が乗ってゐます。人形山車は藤澤の皇大神社の祭礼など神奈川県中央、西部にはみられますが、横浜市内にはありません。

また、戦前に村中が移転した室の木にも屋台があったことがわかりますし、しかもその屋台が舟形で山鉾様に高く竿をたててゐることも見てとれます。

金沢の文化伝統として、山車・屋台のまつり、お囃子や木遣りなど、まつりの姿を是非とも継承してゆきたいものです。

谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に来遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の来訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かったと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭（近くの土日曜）には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年（一四六三）西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりは崇敬者婦人が分けあったといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの霊域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあって、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳献幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年に屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行はれました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣功しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

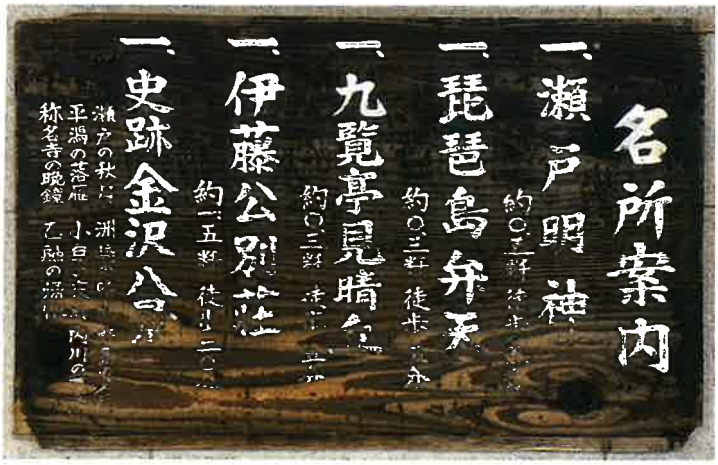
菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃいます。

「金沢八景」案内板 駅ホームの思い出

金沢八景駅のホームに永らく「金沢八景」の木製の名所案内が掲げられてをりましたが、ホームドア設置にともない廃止になりました。

「金沢八景」の記念物としてこれを展示室用にもらい受けました。御参拝のおりに是非御覧ください。



瀬戸神社 (〒二三六ー〇〇二七)
横浜市金沢区瀬戸十八ー十四
(電話) 〇四五ー七〇一ー九九九二
(FAX) 〇四五ー七〇一ー九九九四
http://www.setojinja.or.jp

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ケ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智楽院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあったもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。